

制服リユースの提案と継続

3年4組23番 西川楓、 3年3組11番 北川郁人
3年3組30番 待鳥大和、3年3組21番 富田慎

Keyword : 「海洋ごみ」「マイクロプラスチック」「服の廃棄」「リユース」
「ファストファッション」

1. はじめに

私達は日々海に負担をかけている。人間は毎日ごみを出し、海洋生物や環境に影響を与え続ける。このまま社会を変えなければ、海だけではなく地球全体の自然環境や生物に異常が発生する。そうならないために私達はこのごみ問題を解決するために行動する必要がある。マイクロプラスチックごみの問題もそのひとつである。マイクロプラスチックは海洋生物や環境だけでなく私達自身にも悪影響を及ぼすものだ。マイクロプラスチックは衣服の繊維からも多く排出される。そこで私達は衣服の廃棄を減らすために活動を始めた。

2. 序論

・目的

環境省の調べによると、世界では毎年少なくとも940万トンものプラスチックごみが海に流出している。この海に流出している大量のプラスチックごみは、当然海に暮らす生物に悪影響を及ぼしている。たとえばインドネシアの海岸では、6キロ近いプラスチックごみを体内に溜め込んだマッコウクジラが打ち上げられた。そのマッコウクジラからは、プラスチックのコップ115個、ペットボトル4個、レジ袋25枚、ビーチサンダル2足というおびただしい量のごみが発見された。一体どこから海洋ごみが排出されているのか。海と直接関係する釣り用具などが大半と思われがちである。しかし一見海洋ごみとは関係ないように感じられる街のごみも、実は海へ流れ出ている。投げ捨てなどにより街に捨てられたごみは雨とともに排水溝へと流れ、やがて川から海へと流れ出るのだ。それらが海洋ごみの8割を占めると言われている。そして今この瞬間もどんどん増え続けている。私達が何もしなければ、海洋ごみは増加の一途をたどると考えられる。さらに海洋に投棄されたプラスチックは、そのプラスチックを取り込んだ海洋生物だけでなく、人間を含む陸上生物が食料という形で体内に取り込むことでも、健康に悪影響を与える。つまり海洋に流出したプラスチックは、海を拠点に生活をする海洋生物のみならず、陸を拠点に生活する私達人間にも負荷がかかるのである。この問題を解決するために私達はプラスチックごみの削減をめざした。例えば、最も先進的と言えるフランスでは、2016年に世界に先駆けてプラスチック製のレジ袋の使用が禁止され、2020年に使い捨てのプラスチック容器や食器を禁止する法律を施行した。日本でもビニール袋の有料化やプラスチックパッケージの見直し、ボトルラベルの廃止などはすでに行われている。

海洋に投棄されたプラスチックは、様々な作用で細くなることでその他の問題も引き起こす。それがマイクロプラスチック汚染と呼ばれる問題だ。マイクロプラスチック汚染研究の現状と課題によると、一次的マイクロプラスチックとして、日常生活の中での劣化により生成したマイクロプラスチック破片や、化学繊維の衣服の洗濯により生じた繊維状マイクロプラスチックが下水などに流出流水し、農作物や人体に影響を与えている。

そこで私たちは、マイクロプラスチック汚染を含む海洋プラスチック問題に注目して、研究を開始した。一年生の頃私達はマイクロプラスチック削減のために、衣服からどのようにしてマイクロプラスチックが出るかを調べていた。その排出を抑えるためにマイクロプラスチックよりも小さな網目のネットで作られた洗濯ネットのようなものがあることを知り、それを購入し、実際に洗濯をしてみると、大量のマイクロプラスチック(マイクロファイバー)がネットの中で見つかった。それにより

衣服の洗濯からマイクロプラスチックが出るのがわかった。さらにはファストファッションにより化学繊維でつくられた衣服の廃棄が進むとともに、それらから生じるマイクロプラスチックによっても、プラスチック汚染が進んでいく。

衣類の廃棄をなくしていくための一つの手段として、リユースという方法がある。大学生の衣服のリユース行動促進に関する研究によると、衣服が廃棄によりリユースされないと、その分衣類の新規生産が増えて環境負荷が増加する。衣類のゴミを削減するためには、廃棄を減らしリユースをすすめることが重要である。これらの問題を解決するために、私達に直接関係する「制服」に着目し、そのリユースを進める活動をおこなった。卒業すると廃棄したり、押し入れにしまってしまう制服を利用することを目的とする。国際高校では制服の貸し出しや回収を行っていない。そのため私達で私達の制服をリユースする活動を広げていくことにした。

3. 本論

・結果

2022年10月17日に現在制服リユースを学校全体で取り組んでいる生駒中学校へ訪問しインタビューを行った。

2022/10/17

生駒中学校でのインタビューの様子



制服リユースの取り組みの中心として活動されている、福田先生と阿部先生が質問に応じてくださった。インタビューの結果、実際に制服リユースを行っていくために必要なことがわかった。誰から制服を譲り受け、どのように管理し、誰に渡すのか。生駒中学校では学校の取り組みとして行なっているの、保護者への呼びかけのために学校が手紙などを作成し、保護者へ渡すことができる。しかし私達はゼミでの活動であるため、同じことをするのは難しい。私達はどのような方法で、卒業する1期生の先輩たちから制服を回収するかを考える必要があった。卒業する前に1期生の先輩たちに文書や手紙を渡し、協力を呼びかけるつもりであった。卒業生から寄贈された制服を、新1年生に譲渡したり、校内で制服を汚したり濡らしてしまった場合の貸し出し用に保管しようとしていた。しかし、グローバル探究という授業の一環で行うたった4人の班に誰も見向きもしてくれないのではないかと不安もあった。また、呼びかけただけで制服を寄贈してくれるのか。貸し出すのに十分な人がいるのか、新1年生に貸し出すのに十分な制服を確保できるのかわからない。考えていくうちに3年生は卒業してしまい、呼びかけを行うことができなかった。そこで私達は目標を少し変更することにした。3年生全体ではなく、知り合いや顔見知りの卒業生に連絡を取り、実際に私達の目標やこれまでの活動を説明した。その際に私達の活動を知ってもらうためのリーフレットを作成し、簡単に私達の目的を理解してもらった。



実際のリーフレット

見た人がすぐに理解できるように端的であり、興味の湧くキャッチフレーズにすることを意識した。その結果、卒業生から他の卒業生にも広めてもらうことができ、興味を持って協力してくれた卒業生に寄付を募ることができた。私達は定期的に連絡を取り合い、2023年10月現在、男女そ

それぞれ数名からカッターシャツ4着、スラックスパンツ5着、スカート2着、ネクタイ1本を寄付していただくことができた。ほとんどの制服が擦れてサイズを示す印字が消えていたり、初めからタグなどがなくによりサイズを認識し分別することができなかったが、女子生徒が着やすいサイズや、かなり大きなサイズまでも揃えることができた。想像していた以上に多くの卒業生に協力してもらうことができた。しかし課題はここからであった。この制服を誰に貸すのか。この数では新1年生に呼びかけ、貸し出すことはできないが、毎年数人来る留学生の方への貸出ならではないかと考えた。留学生の滞在期間はさまざま、ほとんどの留学生は制服を買うことはない。実際に同学年に留学生も何人か来ていたが、制服に似たような、シャツやパンツを着ていた。英語科の先生に留学生の方がいつ、何人、どんな方が来るのかを確認し、寄付していただいた制服を貸して着ていただくことができないかと提案し、実現した。制服は先生に受け渡しをしていただいたが、その後、留学生にインタビューし、私達の活動内容を知ってもらうことができた。現在も2名の留学生が制服を活用しており、私たちの活動についても理解してくれている。活動開始当初の目的とは多少異なったが、リユースという大きな目的を果たすことができた。

・考察

制服リユースは制服という衣類に限定されているものの、リユースという観点からはごみの削減や廃棄物の減少、まだ使える素材の再利用やその促進、制服を利用する学生とその保護者へ低価格または無償で提供するという利用者の支援に貢献できる。制服リユースは高校生が自身の高校で取り組めるリユースである。高校生から卒業生や保護者へ寄贈を募り、必要としている方に譲る。この活動を継続していくために、どのように後輩に引き継いでいくのかという課題や、活動の広げ方、広告の仕方の改善は必要である。私達が始めたこの取り組みが継続されれば、これからの国際高校にも、環境にもよい影響を与えるのではないだろうか。廃棄物を減らすことは自然環境への負担を減らし、不要になったモノを必要とする誰かに届けることで、新たに購入するモノをひとつ減らすことができ、資源の節約になる。このような循環を校内にとどまらず広めることができればよりよい自然環境を生み出していけるはずだ。

4. 結論

・まとめ(要約)

最初に海洋ごみの削減からこの活動は始まった。一見大きく見えるこの世界的な問題でも何か力になりたいと思い、ファミリーは本格的に活動を始めた。活動を明確なものにするためにもう少し具体化した目標を立てることにした。それが、「マイクロプラスチック問題」である。探究の続きとして私達のファミリーが引き継ぐためにこれを設定したが、やはりかなり大きな問題であった。そして「マイクロプラスチック問題の解決」というテーマが決まった。調べていけばさまざまな要因が関与していた。その中でも私達は「衣服に起因するマイクロプラスチック問題」に着目することにした。生活必需品である衣服から私達でも問題解決に貢献できるようにするために、身近で私達に直接的な繋がりのあるものを探究することにした。そこで私達は「衣服の廃棄」からもマイクロプラスチックが多くてことを知り、衣服の新しい生産を減らすことが必要であることがわかった。そしてまず、私達が始められるのではないかと考えたのが、「制服リユース」である。「制服リユース」は私たちが身近なところから取り組んでいくことができる解決方法だと考えた。活動実績のある学校へインタビューし、それを参考に私達らしい実践をしていきたいと考えた。国際高校では全く取り組んでいなかった活動であったため、一から私達で制度を作る必要があった。しかし高校生らしい制服リユースという活動を広げていくことで興味を持ってくれる人や知ってくれる人が増えていくのではないかと感じた。それによって新入生全員に制服を無償で提供したり、制服以外の服のリユースやリサイクルにも役立てることができ、活動を大きくしていくことが一番大きな目標なのではないかと感じた。

・今後の課題

- 寄贈された制服をどう管理するか(場所の確保を含む)

- この活動を後輩たちにどのように伝え、継続してもらうか
- 寄贈された制服をどう手入れするか(クリーニングなど)
- 継続方法に関しては、これらの活動を後輩にどう伝えるか

私達は個人の人脈で制服を集めることができたが、人数に限られた。今後は、ポスターや手紙、チラシなどを使い、生徒や保護者への呼びかけをする。また、全校集会や学年集会などで呼びかけをすることなどを提案した。さらにもう1つ、制服の寄贈数についての問題がある。今回私達は卒業生に人脈を使って声をかけ、数人に協力してもらい確定的な個数を把握することができた。だが不確定な協力者の場合、協力してもらえる人数や集まる制服の種類、個数など把握することができない。最悪の場合、誰からも協力してもらえず活動を継続できない可能性も大いにある。さらには留学生はいつ来るか、何人来るかなどの詳細は随時知り得る情報ではない。そのため、寄贈してもらい実際に貸し出すことのできる制服の種類や個数はあらかじめ把握しておくことが必要である。

・おわりに

今回の活動で私達はマイクロプラスチックについて知り、自分たちにできるマイクロプラスチック問題の解決法を考え、行動に移すことができた。世間的に見ればとても小さいことであっても私達4人の活動は多くの人に協力してもらい、人々に影響を与えることもできた。そして私達は制服リユースの活動で自然環境について知り、みんなで解決に導く協働力を得ることができた。それに加えて沢山の人の関わり、会話をし、コミュニティを広げることができた。人々を巻き込んで何かを成し遂げることはそう簡単にできるものではない。寄付を募った卒業生の方や制服を実際に着てくれた留学生、制服の貸し出しや保管に協力してくれた先生方とやりとりをすることにより、コミュニケーション力を高めることができた。今回得た人との関わりを絶やさずにこれからもこの活動を広げていきたい。

5. 参考文献・出典

[論文(ウェブサイト版)]

1.環境省「プラスチックを取り巻く国内外の状況」

<https://teamco2oita.com/wp-content/uploads/2020/01/repa03.pdf>

2.田中秀幸「大学生の衣服のリユース行動促進に関する研究」

https://www2.kpu.ac.jp/life_environ/mat_cycle_soc/report/15tanaka.pdf

3.日本水環境学会「マイクロプラスチックの汚染研究の現状と課題」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jswe/44/2/44_35/pdf